

学 会 記 事

第 82 回新潟消化器病研究会

日 時 平成 17 年 7 月 9 日 (土)
午後 1 時 30 分～
会 場 新潟グランドホテル 5 階
常磐の間

I. 一 般 演 題

1 肺癌の虫垂転移により急性虫垂炎をきたした 1 例

田島 陽介・酒井 靖夫・坪野 俊広
武者 信行・鈴木 晋・小川 洋
正道 隆介・広野 達彦*
済生会新潟第二病院外科
西新潟中央病院呼吸器外科*

症例は 72 歳の男性。70 歳時に肺癌（扁平上皮癌）のため右肺中下葉切除（pT4N2M0 stage III b）が、術後 2 年ほどして右下腹部痛を認めた。臨床症状、血液データ及び腹部 CT より急性虫垂炎と診断し、緊急手術となった。虫垂は腫瘍性に肥厚腫大しており、また、腹腔内には多数のリンパ節転移が存在した。虫垂切除を施行したが、病理所見により肺癌の虫垂転移と診断された。術後数ヶ月は良好に経過したが食欲不振などの愁訴は遷延した。徐々に全身状態が悪化し、虫垂切除から約半年後に死亡した。肺癌において消化管転移はまれであるが、イレウスや穿孔など急性腹症の形で発症する頻度は少なくなく、腹痛、嘔吐、下血などの腹部症状が見られた場合、迅速な精査が必要である。また、適切な外科的処置が遅れてはならない。

2 腹腔鏡検査・手術が施行された、日常診療上比較的まれな 7 疾患

山崎 俊幸・中島 真人・松原 洋孝
桑原 史郎・大谷 哲也・片柳 憲雄
山本 睦生・斎藤 英樹

新潟市民病院外科

当科では腹腔鏡手術を積極的に施行していることから、胆石症・胃癌・大腸癌など通常の腹腔鏡手術適応疾患以外にも、様々な疾患に遭遇してきた。定型的腹腔鏡手術以外の比較的稀な疾患として、以下の 7 疾患を供覧する。

1) 腸重積が疑われた急性腸炎、2) 虫垂炎との鑑別が困難であったクローン病 2 症例、3) 腹膜に多発肉芽腫が併存した虫垂炎、4) 確定診断に苦慮した腹膜播種を伴う脾癌、5) 腸閉塞症状で発症したアミロイドーシス、6) 遅発性の腸閉塞をきたした外傷性腸間膜裂孔、7) 虫垂炎と診断された子宮筋腫茎捻転。

腹腔鏡検査は低侵襲で情報量も多い上、必要に応じて処置・手術に移行できる利点がある。不明の腸閉塞や虫垂炎と鑑別困難な腹痛などには 1 つの有用な手段と思われた。

3 下血を契機に診断・治療された横行結腸動静脈奇形の 1 例

斎藤 崇・玄田 拓哉*・斎藤 悠*
夏井 正明*・姉崎 一弥*・本間 照*
関根 輝夫*・川口 弦**
清野 康夫**・塚田 芳久***

新津医療センター病院内科
県立新発田病院内科*
同 放射線科**
県立十日町病院内科***

症例は 64 歳、女性。昭和 63 年急性心筋梗塞・糖尿病で入院。以後数回貧血で入院したが出血源は不明。平成 17 年 1 月 20 日頃から黒色便・動悸・めまい出現し 24 日入院。同日の GIF では出血源なし。翌日の CF で横行結腸に ϕ 1cm 程のなだらかな立ち上がりの隆起あり。隆起は全体に拍動し、発赤。表面には細い蛇行血管があり、頂部

の中心に ϕ 1mm以下の白色血栓が付着。この隆起から肛門側に向かって、蛇行する比較的太い静脈が連続していた。これらの内視鏡所見から動静脈奇形と診断した。2月9日血管造影検査-横行結腸に流入する右結腸動脈の分枝から造影早期相に蛇行する静脈が描出され、動静脈奇形と考えられた。ハイリスク症例のため16日コイルによる動脈塞栓術施行した。術後AVM描出されず。22日CF-横行結腸の隆起の高さは減じ、頂部の白色血栓と表面の細血管は消失。この隆起から肛門側に向かって蛇行する静脈も消失。23日から食事開始。24日退院となった。

4 悪性が疑われた出血性肝嚢胞の1例

佐野 文・宮下 薫・藍澤喜久雄
清永 英利・森岡 伸浩・小方 則夫*
渡辺 卓也*・本間 信之*

燕労災病院外科
同 内科*

嚢胞腺癌を疑う場合、血中CEA、CA-19-9の上昇や、画像所見が有用であるが、鑑別が困難な症例も存在する。今回経過観察中興味ある形態変化を示し、嚢胞腺癌が疑われた出血性肝嚢胞を経験したので報告する。

症例は56歳の女性で主訴は背部痛。2000年秋ころより右背部痛あり。2001年3月30日当院内科受診。肝右葉に14cm大の単純性嚢胞をはじめ多発嚢胞を認めた。この際CA19-9は正常であり、経過観察となっていた。以後経過観察していたが2005年1月CTで肝右葉の嚢胞にのみ、他の嚢胞とは異なり内容液が高濃度で樹枝状の部分をも認めた。嚢胞腺癌を疑われ2005年4月22日外科紹介された。4月26日右葉の嚢胞摘出術、および他の単純性肝嚢胞の開窓術を施行。迅速病理にて出血性単純性肝嚢胞と診断された。単純性肝嚢胞の癌化例、穿刺による播種の報告もあり、嚢胞腺癌が疑われる症例は切除術の適応があると考えられた。

5 C型慢性肝炎にInterferon α -2b, Ribavirine併用療法を施行し潰瘍性大腸炎の増悪を認めた1症例

井上 真・渡辺 卓也・原田 健右
本間 信之・小方 則夫

燕労災病院消化器内科

症例は55歳男性。平成3年5月よりC型慢性肝炎で当科定期受診していた。平成15年7月軽度の下血を認め、下部消化管内視鏡(CF)にて潰瘍性大腸炎も疑われたが、速やかに改善し確定診断に至らなかった。平成16年12月、高分化肝細胞癌に対しラジオ波焼灼療法(RFA)を施行した。平成17年1月20日よりPEG-IFN α -2b 100mg/weekとRibavirin 800mg/day投与開始。投与3ヶ月より再度、下血が出現し、CFでは直腸から下行結腸に活動期の潰瘍性大腸炎の所見を呈した。mesalazine 3000mg/dayとprednisolone 30mg/dayの内服を再開し、PEG-IFNを中止した。1日5-7行の下痢、鮮血便、全身倦怠感、下腿浮腫、食欲不振、-8kg/1ヶ月の体重減少を認め、5月初旬に入院加療とし改善した。IFN治療を契機に潰瘍性大腸炎が再燃したと考えられ、Interferon α -2bとRibavirin併用療法での報告は本例が本邦初であり報告する。

6 肝細胞癌治療におけるReal-time Virtual Sonography (RVS)の有用性

川合 弘一・五十嵐正人・須田 剛士
野本 実・青柳 豊

新潟大学教育研究院医歯学系
消化器内科学分野

【はじめに】Real-time Virtual Sonography (RVS)は、CT volume dataから超音波(US)断層面に対応するMultiplanar reconstruction画像を瞬時に作成、表示するシステムであり、近年臨床応用されている。

【目的】肝細胞癌(HCC)の局所治療におけるRVSの有用性につき検討する。

【対象】CTで描出されるが、USで認識できないHCC計10結節。